World Watching 100th issue celebration

世界の港湾の鼓動を聞く

連載100回を迎えたWorld Watching

井上　聰史
国際港湾協会事務総長

1 World Watchingの舞台裏

連載World Watching（WW）が100回を迎えた。2000年6月から8年4ヶ月、一度も休むことなく回を重ねて来られたのは、執筆頂いた方々のご協力の賜物であり、心より感謝申し上げる次第である。

これほどグローバル化が進展しているにも拘らず、日本の港湾人には世界の港湾をめぐる活きた情報が必ずしも身近な形で届いていない。それなら、広く読まれている機関誌「港湾」に連載すればよいと、気軽に提案したのが始まりであった。当初は2～3カ月置きに自分で書く羽目になり先行きを危ぶんだが、多くの方のご協力で何とか軌道に乗せることが出来た。

執筆は、会議出席や調査などで世界の港湾を訪れたり、あるいは在外公館や海外事務所に勤務する港湾人に、プロの眼を通して得た情報や体験の中から、日本の港湾人に役立つと思われるテーマを書いて頂いてきた。取り上げる対象はハードからソフトまで極めて幅広い。見開き2頁の紙幅であるため、前口上なしに鋭くテーマに切り込むことをお願いしてきた。

海外での本来業務の傍ら、港湾のプロとして興味深い事象に目を配り、さらに帰国直後の多忙な時にWWの執筆をお願いするため、執筆者には多大なご苦労をお掛けしている。また僭越にも編集者として内容を査読させて頂き、しばしば厚かましい修文をお願いしている。

2 港湾Watchingの足跡

さて、こうして毎月お届けするWWであるが、100回を通して幸いにもほぼ世界の全地域に足跡を残すことが出来た。表1のように、東アジアから東南アジア、南西アジア、中東、オセアニア、そしてヨーロッパ、アフリカ、北米、中南米と、極めて広い世界の港湾についてwatchingしてきた。

件数的にはヨーロッパとアジアの港湾に関するものが約40％ずつで大半を占める。予想に反して北米の港湾に関する報告が少ない。またヨーロッパは北部の成熟港湾に限らず急成長を続ける南部の港湾も数多く登場した。アジアはやはり東南アジアに頻度多く足を運んでいるが、中国や韓国など東アジアも10％と多く、日本の港湾人の高い関心が伺える。

港湾のプロ達の眼は、流石にしっかりと世界の港湾の鼓動を幅広い視野から捉えている。今回、WW掲載の100本の論文をテーマ別に分類してみた。表2のように、驚くほど多岐にわっていることが見て取れる。なかでも各国の港湾開発計画やその概況に関するものを別にすれば、やはりコンテナ港湾の開発と戦略、そして民営化など港湾の管理体制に集中している。過去8年間における日本の港湾界の関心事をそのまま反映していると云えよう。

地域区分	件
アジア	38
東アジア	11
東南アジア	23
南西アジア	4
中東	3
オセアニア	4
ヨーロッパ	40
北部ヨーロッパ	29
南部ヨーロッパ	11
アフリカ	7
北米	6
中南米	5

表1　WW掲載論文の対象地域

テーマ分類	%
港湾管理体制	15
コンテナ港湾	26
港湾開発全般	22
技術開発	6
港湾環境	6
港湾防災・保安	4
港湾情報化	1
観光・レク港湾	7
ウォーターフロント開発	4
特別プロジェクト	9

表2　WW掲載論文のテーマ

と同時に、大型ケーソン堤や荷役自動化システムなど新技術の開発や導入、自然再生やリサイクルなど港湾環境対策、津波や高潮への大規模な防災対策、マリーナやクルーズを中心とする港湾開発、個性溢れるウォーターフロントの開発など、プロの眼を通した観

察と評価が楽しくも有益な情報を伝えてくれた。一方で、港湾の情報化と保安対策については、僅か1件ずつのみであった。

また、パナマ運河の拡張、海上風力発電や内陸水運網の開発など、興味あるプロジェクトも数多く紹介された。

3 変貌する世界の港湾

2000年6月から8年以上にわたるこの連載期間は、文字通り国際経済のグローバル化が一層の進展を見せ、世界の港湾がダイナミックに変貌を遂げてきた時期と重なる。

(1) 港湾の民営化、経営体制の変革

1980年代初頭から1990年代後半にかけて、世界の港湾は「民営化」という大きな変革を遂げた。ターミナル運営を民間事業者に委ね効率化を目指したのである。いわゆるLandlord型の新しい港湾管理が根付いてきた2000年以降のこの時期、WWはアジア、ヨーロッパ、南米など多くの港湾の経営実態や問題点に迫っている。

とくにイタリアにおける民間参入の実態と効果(No.15)、ブルガリア国営港湾の変革への挑戦(No.48)、ブラジル（No.47)、フィリピン（No.49)、ロシア（No.67）の港湾民営化の実態が興味深い。民営化の問題点を鋭く分析したインドネシア(No.38）は貴重な論文である。2004年に港湾法を初めて制定し地方分権と民営化を取り入れた中国についても、直ぐに大連港の報告がなされた(No.65)。また、ニュージーランドのオークランド港について民営化の揺り戻しとも云うべき株式上場廃止を分析した論文（No.66）は重要である。

(2) コンテナ港湾の開発と戦略

世界の港湾は年率10％を上回るコンテナ貨物の増加への対応に追われ、その一方で熾烈化する港湾間競争に勝ち残りを賭けた戦略を展開している。とくにトランシップ・ハブ港湾の開発（No.6)には、香港/シンガポール（No.10)、スリランカ(No.55)、中東のサラーラ（No.5、45)、地中海のアルヘシラス（No.13)、ジオイアタウロ/マルタ(No.36、50）など多くの論文が寄せられた。またシンガポールに対抗するマレーシアのタンジュンペラパスの開発（No.14、69）が興味深い。一方、急成長を遂げる中国については、注目を集める上海洋山新港の開港直前の報告（No.62）がなされ、また香港に急迫する深圳港のコンテナ港開発を相次いで分析している（No.86、99)。

2000年12月に取り上げた世界初の両舷荷役方式のコンテナターミナル（アムステルダム港）の近況

主要なコンテナ港湾では次世代ターミナルの開発を大胆に始めている（No.34)。シンガポールの立体式ヤードによる省力化、省空間化（No.1）やアムステルダムの両舷荷役式ターミナル（No.7)はその嚆矢となるものである。また、ターミナルの効率化にとどまらず、ロジスティクスの付加価値を創造する港湾への進化も新たな戦略となっている。WWは2001年に早くもドイツのデュイスブルグ港（No.12）を取り上げ、その後もバルセロナ（No.28)、釜山新港（No.72、92）などの取り組みを伝えている。

4 日本の港湾の国際化へ

港湾を取り巻く環境はますます国際化が進み、我が国の港湾経営の舵取りにおいてもグローバルな視点が一段と重要性を高めている。文化的な背景や経済の構造に違いはあっても、世界の港湾人が日夜取り組んでいる多くの課題や挑戦は、日本の港湾人のそれらに通じるところが極めて大きい。その意味でWWが少しでも皆さんのお役に立つことが出来れば幸いである。また、是非ともWWへの積極的な寄稿や意見をお願いしたい。

WW連載を続ける中で、手応えと喜びを感じるのは寄せられる質問や「読者の声」に載るコメントである。また「記事に登場する全ての地名が冒頭の地図に載っており読みやすい」とお褒め頂いたこともあった。これもWW1回からずっと心掛けている編集方針の一つである。

最後に、WW連載のため執筆者の確保や調整に協力頂いている国土交通省港湾局国際企画室、締め切り間際までレイアウトや校正に腐心してくださる（株）ウェイツの坂井佳子女史に、心からの感謝の意を表して筆を置く。

※本文中の(No.X)は「港湾」掲載時の連載番号である。

World Watching since June 2000